

住宅用火災警報器を設置しましょう!!

『住宅用火災警報器』～住宅火災の逃げ遅れを防ぐ

なぜ住宅用火災警報器の設置が必要なのか?

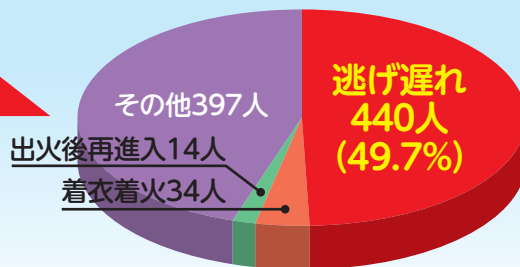
全国の住宅火災で毎年約千人の方が亡くなっています。火災は財産だけでなく、人の命をも奪います。住宅火災の発生や逃げ遅れを防ぎ、命を守るために「住宅用火災警報器」を適切な場所に設置しましょう。



住宅火災による死者885人

住宅火災による死者の約5割が逃げ遅れ

平成28年中の火災データ(消防庁)
※放火自殺者を除く



住宅用火災警報器はどこに設置するの?

住宅用火災警報器は寝ている間の火災に早く気づき、早く避難するためのものです。**煙式の警報器**を「寝室」、「階段の天井付近(2階以上に寝室がある場合)」に設置して下さい。

※台所には警報器の設置が義務付けられていませんが設置することをお勧めします。



住宅用火災警報器の点検は必要なの?

点検ボタンを押すか、点検ひもをひっぱり、定期的に作動確認を行なって下さい。**作動確認しても警報器に反応がない場合、または火災警報以外の警報音が鳴った場合は「本体の故障」か、「電池切れ」**です。

「本体の故障」はもちろん、「電池切れ」の場合も、本体ごと新しいものに買い換えることをお勧めします。警報器の本体または電池の寿命は機種によって異なりますが概ね**10年**です。



電池切れに備え定期的に点検しましょう!

住宅用火災警報器の奏功事例

事例	内容
1 就寝中の居住者が警報音で目覚めた事例	居住者が、布団の上でたばこを吸いながら寝てしまったため、出火した。住宅用火災警報器の警報音で目を覚まし、隣人に状況を知らせ、協力して消火し、119番通報を行なった。
2 出火場所以外にいた居住者が警報音に気付いた事例	ガスこんろで鍋に火をかけたまま、その場を離れてしまったため、出火した。居住者が、住宅用火災警報器の警報音に気づき、119番通報を行い、消火した。
3 隣人が警報音に気付いた事例	共同住宅において居住者の留守中に台所から出火した。近隣住民が、住宅用火災警報器の警報音に気づき、当該住宅から黒煙を確認したため、建物所有者に119番通報を依頼し、合鍵を使って進入した後、消火器で消火した。

問い合わせ

大曲消防署 南分署予防班 ☎0187(87)8119 東分署予防班 ☎0187(88)2119
町住民生活課 環境安全班 ☎0187(84)4903

4月2日は「世界自閉症啓発デー」 4月2日から8日は「発達障害啓発週間」です

「発達障害」は、生まれつき脳の発達が通常と違うために、育児がうまくいかないことがあります。成長するにつれ、自分自身のもつ不得手な部分に気づき、生きにくさを感じることもあるかもしれません。

「発達障害」はその特性を本人や家族・周囲の人がよく理解し、その人にあったやり方で日常的な暮らしや学校、職場での過ごし方を工夫することが出来れば、持っている本来の力がしっかり生かされるようになります。

「発達障害」とは生まれつきの特性で、病気とは異なります

「発達障害」はいくつかのタイプに分類されており、自閉症、アスペルガー症候群、注意欠如・多動性障害(ADHD)、学習障害、チック障害などが含まれます。これらは、生まれつき脳の一部の機能に障がいがあるという点が共通しています。

同じ人に、いくつかのタイプの「発達障害」があることもあり、同じ障がいがある人同士でもまったく似ていないように見えることがあります。

自閉症スペクトラム障害

現在の国際的診断基準の診断カテゴリーである広汎性発達障害(PDD)とほぼ同じ群を指しており、自閉症、アスペルガー症候群、そのほかの広汎性発達障害が含まれます。自閉症スペクトラム障害の人は、最近では約100人に1人から2人存在すると報告されています。

典型的には1歳台で、人の目を見ることが少ない、指さしをしない、ほかの子どもに関心がない、などの様子がみられます。保育所や幼稚園に入ると、一人遊びが多く集団行動が苦手など、人との関わり方が独特なことで気づかれることがあります。言葉を話し始めた時期は遅くなくても、自分の話したいことしか口にせず、会話がつながりにくいことがしばしばあります。また、電車やアニメのキャラクターなど、自分の好きなことや興味のあることには、毎日何時間でも熱中することがあります。初めてのことや決まっていたことの変更は苦手で、なじむのにかなり時間がかかることがあります。

幼児期から個別や小さな集団での療育を受けることによって、コミュニケーションの発達を促し、適応力を伸ばすことが期待できます。また、療育を経験することによって、新しい場面に対する不安が減り、集団活動に参加する意欲が高まります。言葉によるコミュニケーションに頼りすぎず、視覚的な手がかりを増やすなどの工夫をすれば、子どもの不安が減り、パニックが少なくなることが期待できます。幼児期から成人期を通して、身近にいる親や配偶者が本人の特性を理解していることが重要です。

注意欠如・多動性障害(ADHD)

7歳までに、多動・衝動性、あるいは不注意、またはその両方の症状が現れ、そのタイプ別の症状の程度によって、多動・衝動性優勢型、不注意優勢型、混合型に分類されます。

小学生を例にとると、多動・衝動性の症状には、座っていても手足をもじもじする、席を離れる、おとなしく遊ぶことが難しい、じっとしていられずいつも活動する、しゃべりすぎる、順番を待つのが難しい、他人の会話やゲームに割り込む、などがあります。

不注意の症状には、学校の勉強でうっかりミスが多い、課題や遊びなどの活動に集中し続けることができない、話しかけられていても聞いていないように見える、やるべきことを最後までやりとげない、課題や作業の段取りが下手、整理整頓が苦手、宿題のように集中力が必要なことを避ける、忘れ物や紛失が多い、気が散りやすい、などがあります。

多動症状は、一般的には成長とともに軽くなる場合が多いですが、不注意や衝動性の症状は半数が青年期まで、さらにその半数は成人期まで続くことが報告されています。また、思春期以降になってうつ症状や不安症状を合併する人もいます。

親をはじめとする家族がADHDに対する知識や理解を深め、本人の特性を理解することが、本人の自尊心を低下させることを防ぎ、自分を信じ、勉強や作業、社会生活への意欲を高めることにつながります。

学習障害(LD)

全般的な知的発達には問題がないのに、読む、書く、計算するなど特定の事柄のみが難しい状態を指し、それぞれ学習成績や日常生活に困難が生じます。こうした能力を要求される小学校2年生から4年生ごろに成績不振などから明らかになります。その結果として、学業に意欲を失い、自信をなくしてしまうことがあります。有病率は、確認の方法にもよりますが2%から10%と見積もられており、読みの困難に

ついては、男性が女性より数倍多いと報告されています。

学習障害の子どもに対しては、教育的な支援が重要です。読むことが困難な場合は大きな文字で書かれた文章を指でなぞりながら読んだり、書くことが困難な場合は大きなマス目のノートを使ったり、計算が困難な場合は絵を使って視覚化するなどのそれぞれに応じた工夫が必要です。親と学校とが、子どもにある困難さを正しく理解し、決して子どもの怠慢さのせいにしなくて、適切な支援の方法について情報を共有することが大切です。

問●町福祉保健課 福祉班 ☎0187(84)4907